発達に即応した教育課程の編成

―― 動きを生かした生活単元学習の展開 ――

1. テーマ設定の立場

(1) 特殊学級から養護学校へ

本校は，昭和５５年４月附属小・中学校特殊学級が発展的に解消し，附属養護学校として開校した学校である。更に，翌年４月には高等部も設置され今日に至っている。そのため，特殊学級時代の教育課程を改訂し，養護学校として小・中・高一貫した教育課程の編成を急がなくてはならなくなった。

(2) 児童・生徒の発達の程度の重度化と障害の多様化

小学部においては，従来比較的発達の程度の重い児童が多かったが，中学部，高等部でも除々に重くなりつつある。（昭和５６年４月現在，ＩＱ５０以下の児童・生徒，小学部８３％，中学部６５％，高等部６０％）また，ダウン症やてんかんなどの症状のある児童・生徒だけでなく，自閉，多動といった傾向のある児童・生徒も増加しつつあり，障害の多様化がみられるようになり，個々のニーズに応じた教育課程の編成をせまられてきた。

(3) 養護学校学習指導要領の改訂

昭和５４年養護学校学習指導要領が改訂され，指導内容についてのとらえ方，養護・訓練の考え方などいくつかの変更があった。そのため，新指導要領にそった教育課程の編成が必要となった。

以上の３点に立って，昭和５５年度は「発達に即応した教育課程の編成をめざして」というテーマを設定し，教育課程の編成を行った。発達とは，個体の形態や機能の量的拡大と質的変化の過程ととらえ，発達に即応したとは，様々な実態にある児童・生徒の要求に応ずること，つまり，彼らの発達の状態を知り，ひとりひとりの発達を促すことであるととらえて先のようなテーマを設けた。ところで，この教育課程は，各学部の指導計画の大要を示すにとどまっており，今後の改訂にまつところが大きい。

そこで，本年度から，昨年度作成の教育課程を基に，年次計画で年間指導計画の充実を図ることにした。その際，教育課程全体を貫く考えを設け，その考えに立って指導計画の見直しを行うことにした。その考えとして，児童・生徒の表情，行動などの実態やフロスティグらの研究を参考に，心の動き，身体の動きなど，「動き」に着目することにした。今年は，合科・統合した指導の形態のひとつである生活単元学習を中心に，実態調査，「動き」の考え方，生活単元学習の考え方などの理論研究，生活単元学習の授業を通しての研究などの面から，研究を進めることにした。